図 1

一元論　世界にあるのは物質だけ　＝唯物論
　　観念だけ　＝観念論、唯心論

二元論　世界には物質と精神（霊）がある。世界の全てはどちらかに属する。

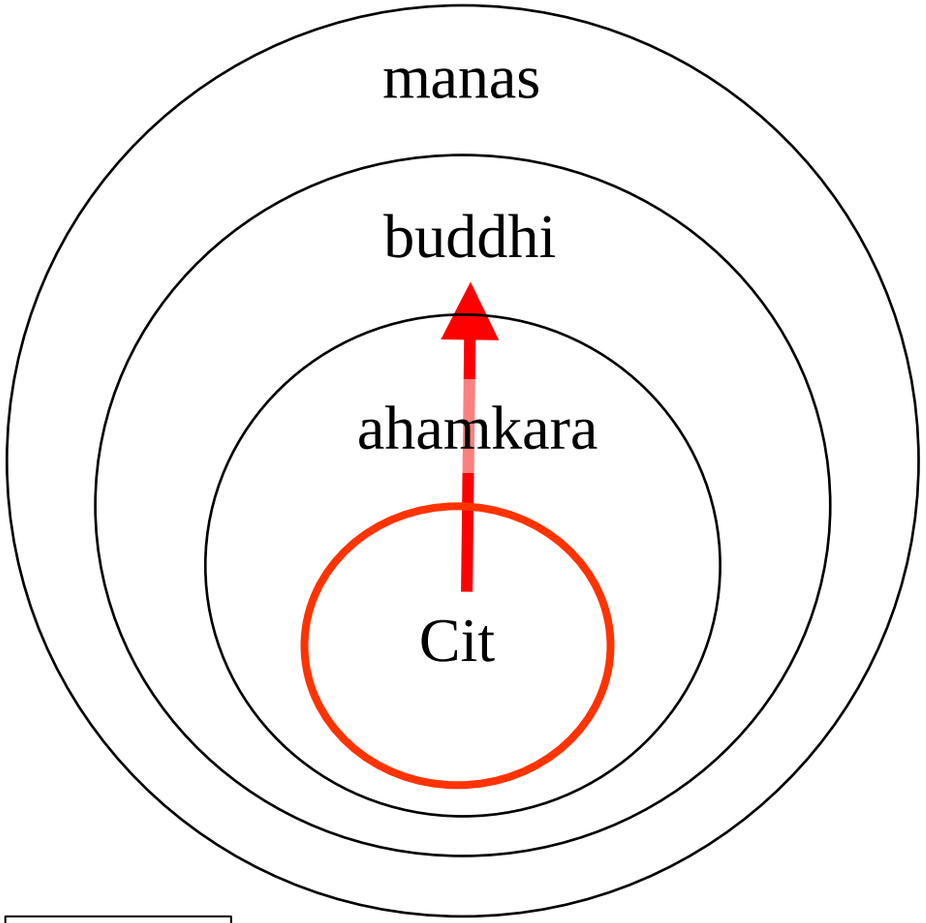
非二元論　個々の物質と精神の区別はなく、世界には一つの意識があるのみ

絶対非二元論　　すべては意識であり、光である。

限定非二元論　＝縁起の理論　地球に限定

manas = 自我＝生存、維持、損得担当＝エゴ

身体というハードを御するためのソフトウェアがmanasであり、buddhi が入るとmanas が起動される。manasはbuddhiの指令がなくても自律して身体を活動させることができる（本能的活動）。そのため、manas はエゴ担当であり、損得を価値基準とする。
自分の身体はあくまでも自分の身体であり、身体は自分ではない。



ジブン、ワタシ、デカルトの「われ」はbuddhi であり、manas はbuddhi の影であり、小間使いであり、使用人

buddhi と atman の関係が不明瞭

図 2

ahamkara という器（自分＝空）を通るcit が atman

Cit は光の海＝あの世にある。
一つしか無いから、Cit
Cit の一部（さざ波, cit = atman）が一人一人の個人の意識（buddhi）になる

英語圏（キリスト教文化圏）はbuddhi の概念がない。
→ 個人＝自分と神との対立関係、自然・世界との対立関係

インド哲学	manas	buddhi	ahamkara, atman	cit, Cit, brahman
英語圏	mind		heart, soul, Self	God
日本	心	心	心、真我＝空	神

日本人は manas, buddhi, atman を全て心と呼ぶ。
区別はしているらしい。

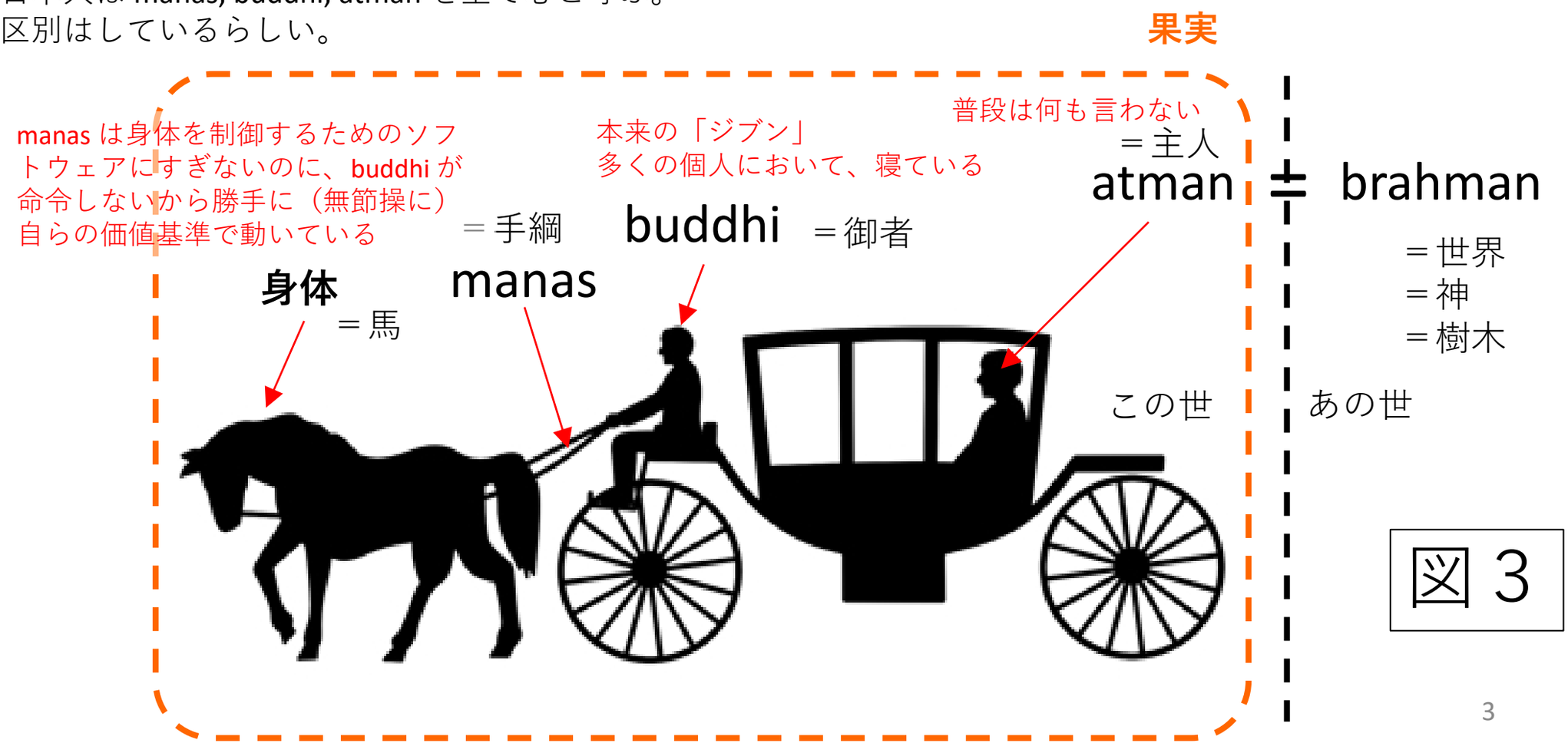


図 3

図 4

「地球のマユ」

生命が関係（活動）する領域
（＝地球の表面、表層、大気圏）
＝厚さ100 km くらいの
地球を覆う「空間」

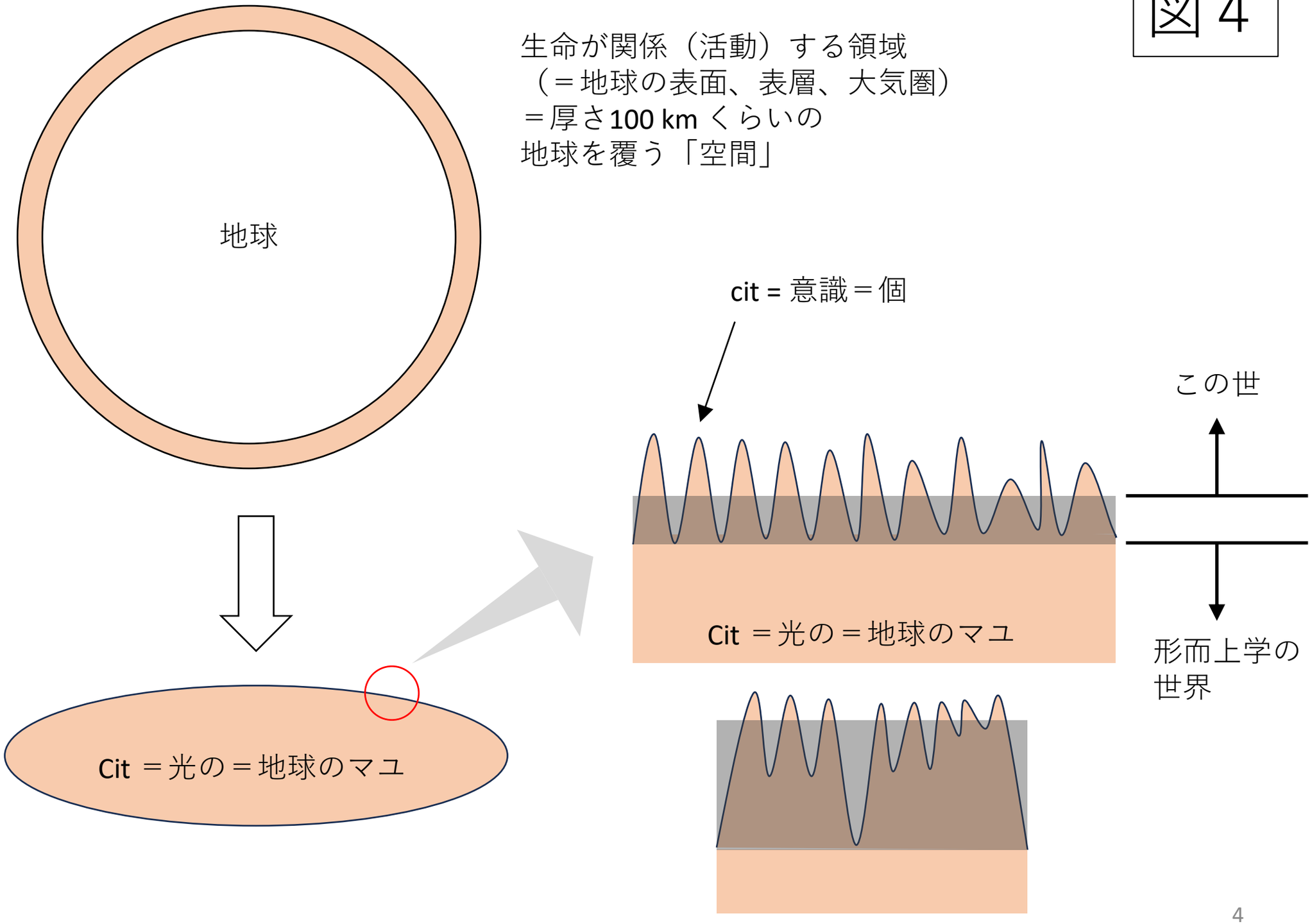


図 5

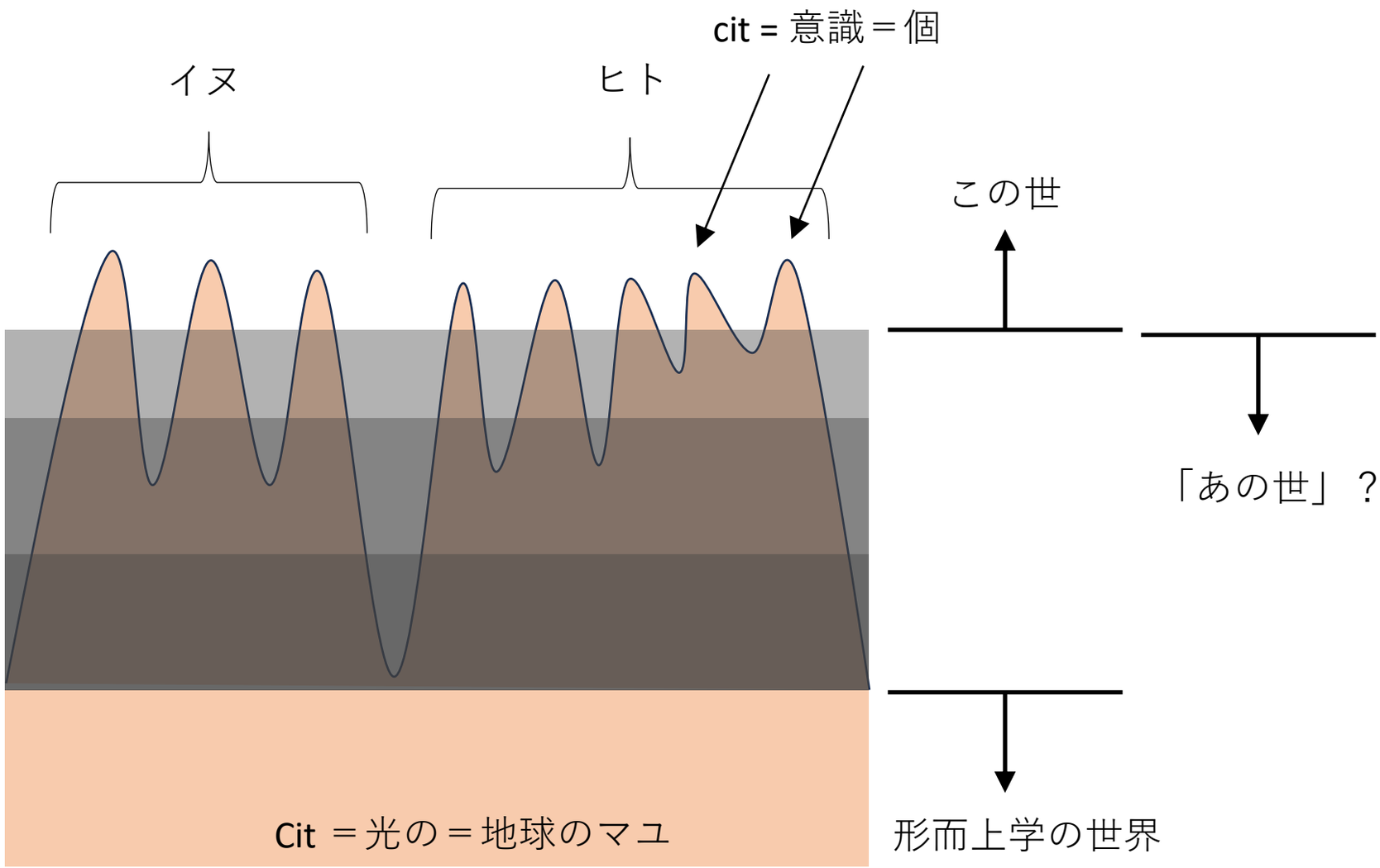
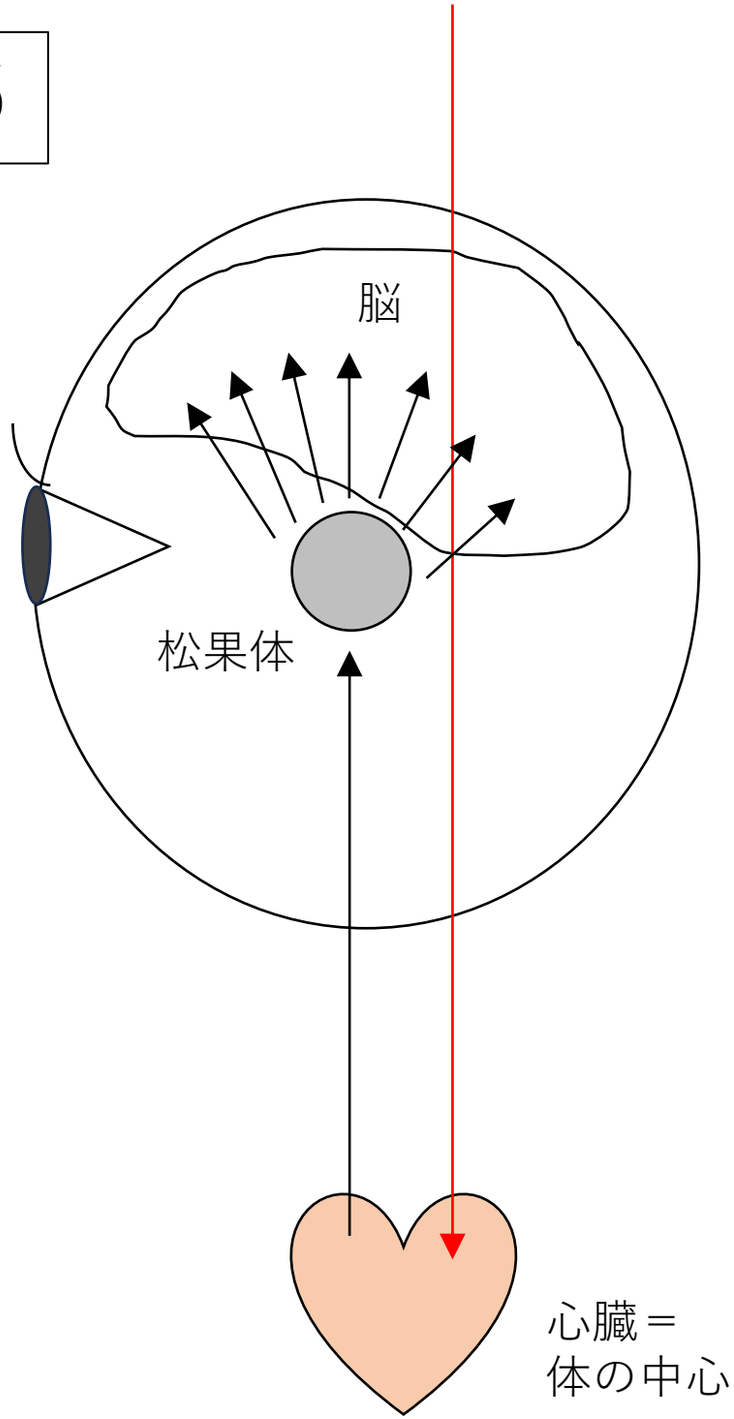


図 6



光 が脳天から体に入り、
体の中心である心臓に入射する（atman）。
「感じる」のは「胸」であり、脳は感じない。
脳は考える。

光（＝atman）は松果体に入射し、buddhi を生む。buddhi は未だ純粋な光であり、エゴ＝自我を持たない

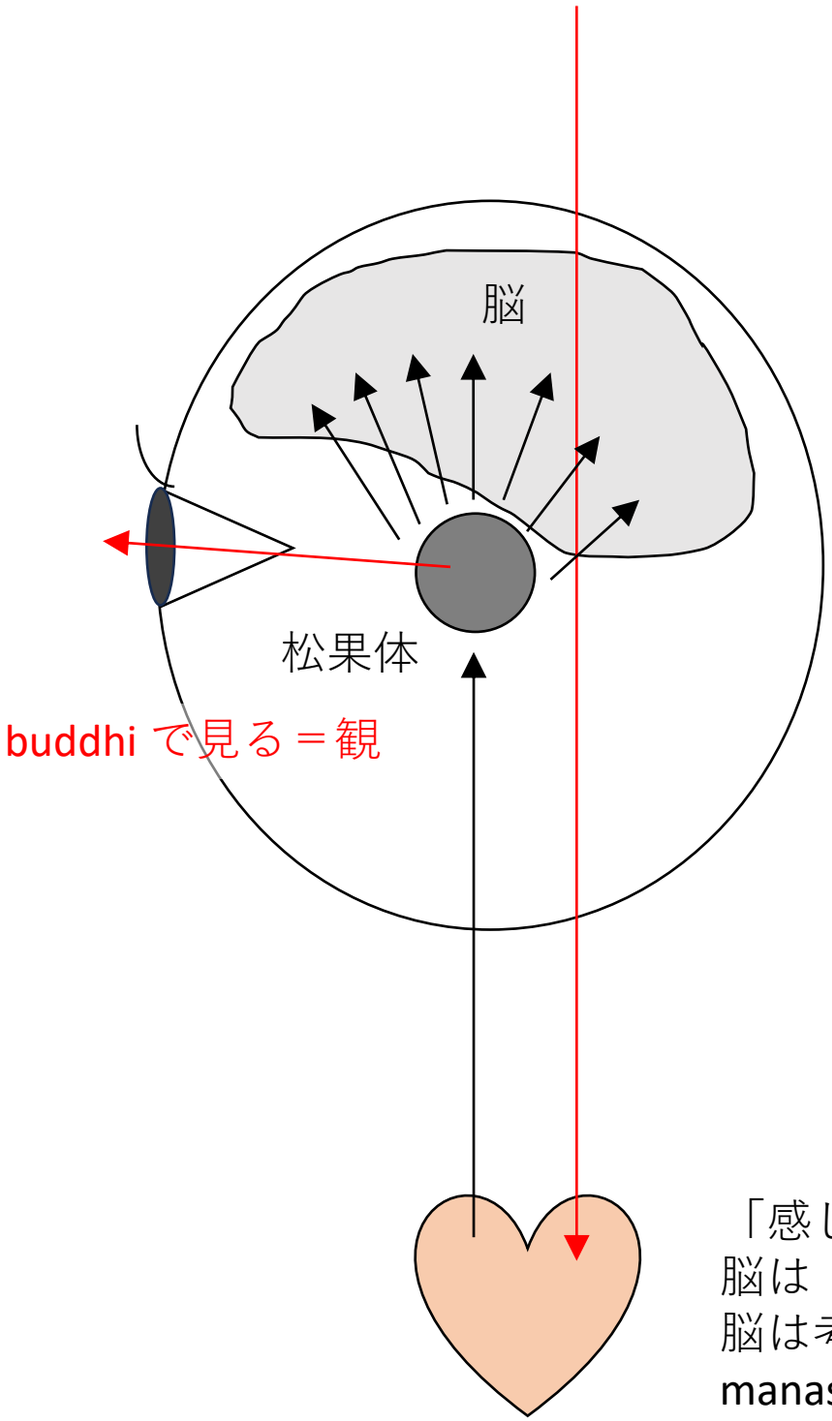
buddhi が脳を照らし、生まれる動きがmanas である。

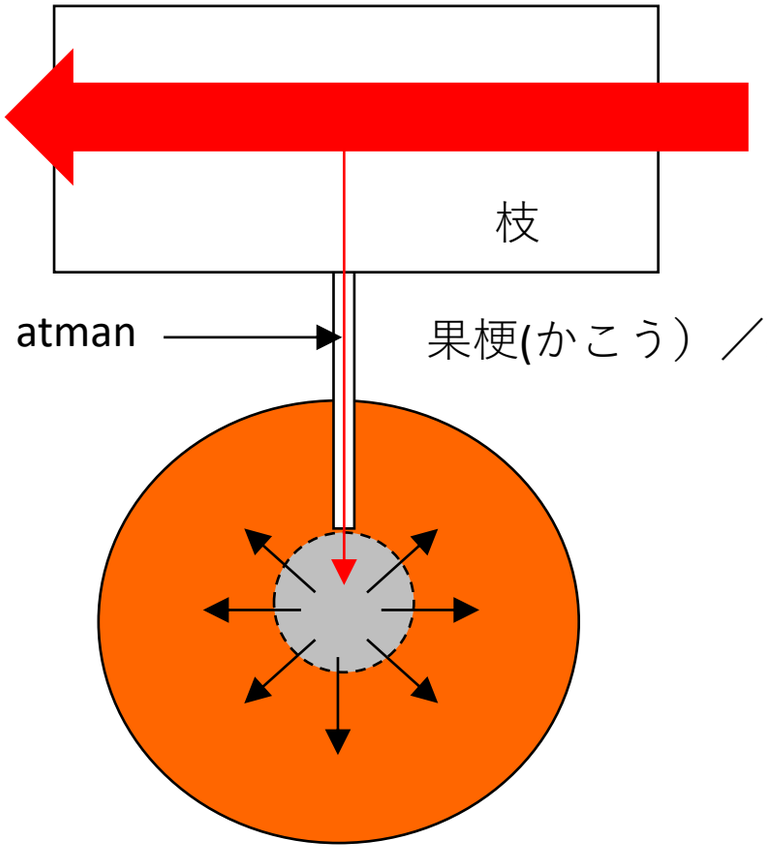
buddhi が動きの元＝いのち
manas は身体に付随するソフトウェア

buddhi という電気を入れると、manas が走る

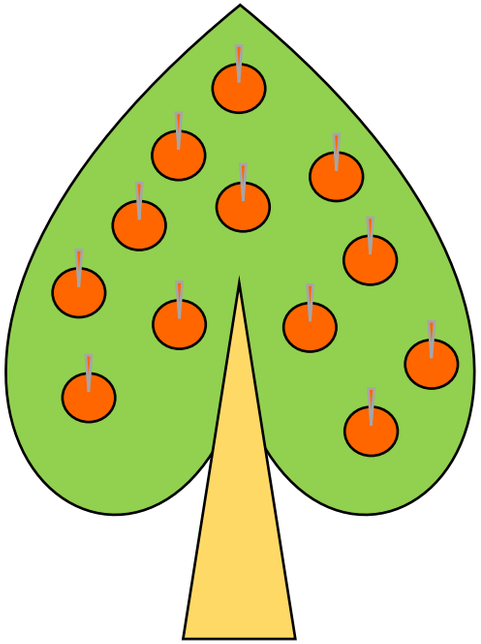
atman、buddhi にはエゴ（＝自我）がない。
manas がエゴ担当

図 7





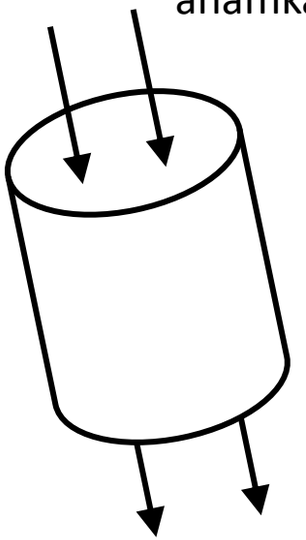
種は中心にできる
＝「個体」の再生



「感じる」のはheart であり、
脳は「感じない」
脳は考える器官
manas は考える機能、ソフトウェア

樹木が
光の海、
マユ、
brahman

図 8



ahamkara を通る意識＝ cit が atman

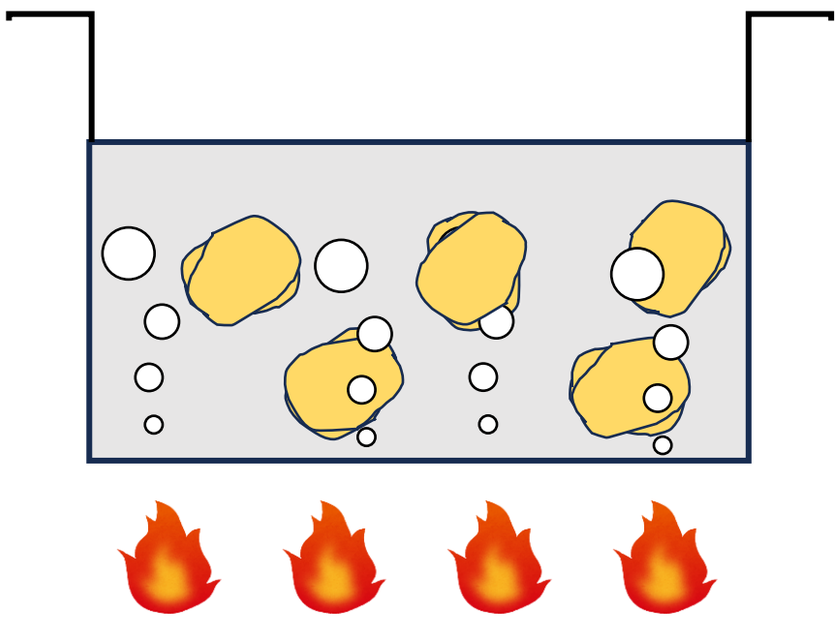
ジブン＝器　ahamkara

DVDにある透明メダカの血流をみて、
正木さんはこのイメージを再確認した

世界（食べ物、水、空気）が「自分」という器を通って
「自分」という現象が生起している。
「自分」とは器、ないしは変換装置＝演算子である
確かに空っぽ

buddhi が生まれ、manas が起動する＝ジブン

図 9



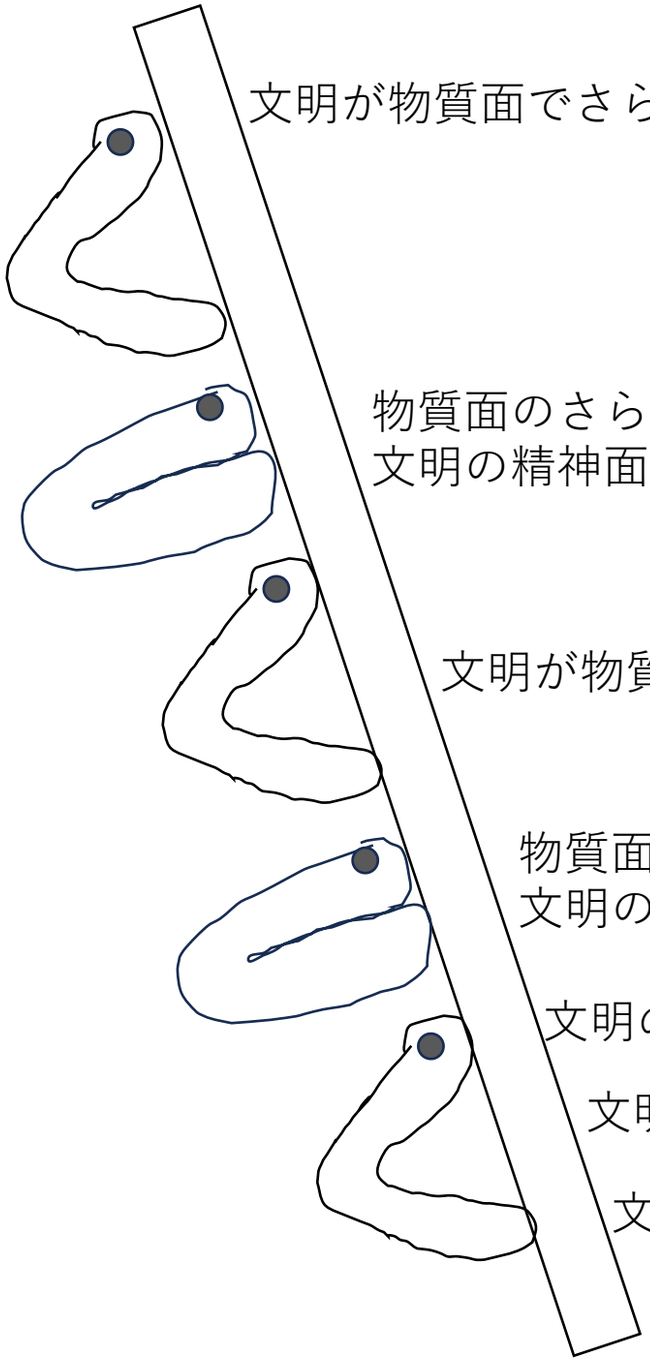
鍋の中で踊っているジャガイモが manas
ジャガイモは自分で踊っていると信じている

鍋が火にかかる
（cit が入ってbuddhiが起動すると）、
ジャガイモが踊る
（manas が起動し、身体を動かす）

brahman の意向と違う踊りを踊ろうとするから
苦しい、楽にならない

manasを躍らせているのが　光の海
＝生命のマユ
＝世界
＝ brahman

図１０



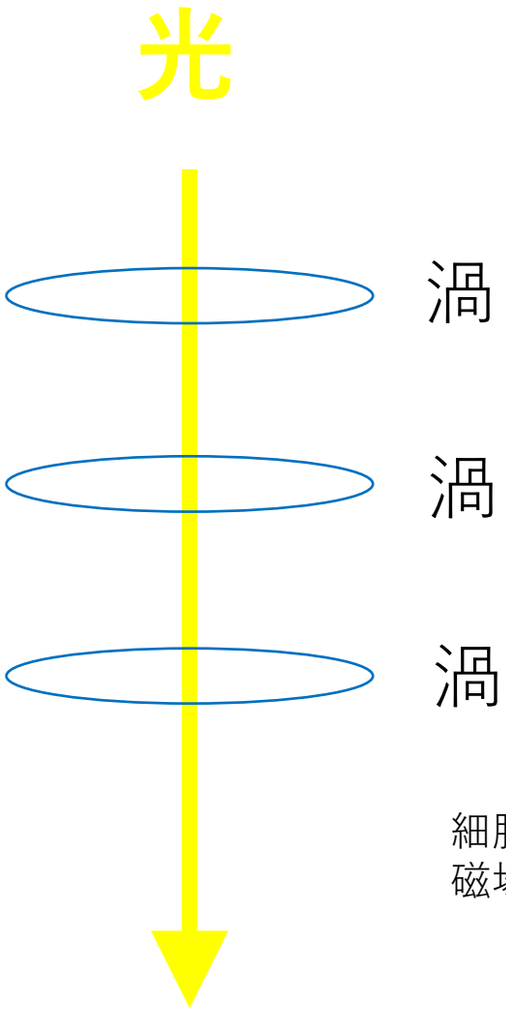
止揚＝止観
今の階に居ることを止めると、一段上にあがる

← これがアセンション？

← これがアセンション？

光がさすと、プラーナがまわる　＝渦

プラーナ
サンスクリットで呼吸、息吹などを意味する言葉である。日本語では気息と訳されることが多い。
インド哲学では、同時に人間存在の構成要素の1つである風の元素をも意味している。そして生き物 (すなわち息物) の生命力そのものとされる。



プラーナがまわると、物質が構造化される

チャクラの渦（＝manasによるエゴの暴風雨状態）を止める
＝ヨガ
＝ buddhi が目覚めて、Cit につながる

光　→　熱、明るさ　≒　意識

細胞内の物質（荷電粒子）が（ブラウン運動で）動くと、磁場が発生する。
磁場内を荷電粒子が動くと荷電粒子に力が作用する。

通常の可視光は電磁場で曲げられないが、テラヘルツ光はいろいろ起こるらしい

図１１（分析・研究中）